

さきたま

埼玉古墳群の成立を支えた産業集落の発見

— 「中条古墳群、中条中島遺跡の製鉄遺構」 —



会期:令和元年10月10日から令和2年3月27日 会場:熊谷市立江南文化財センター

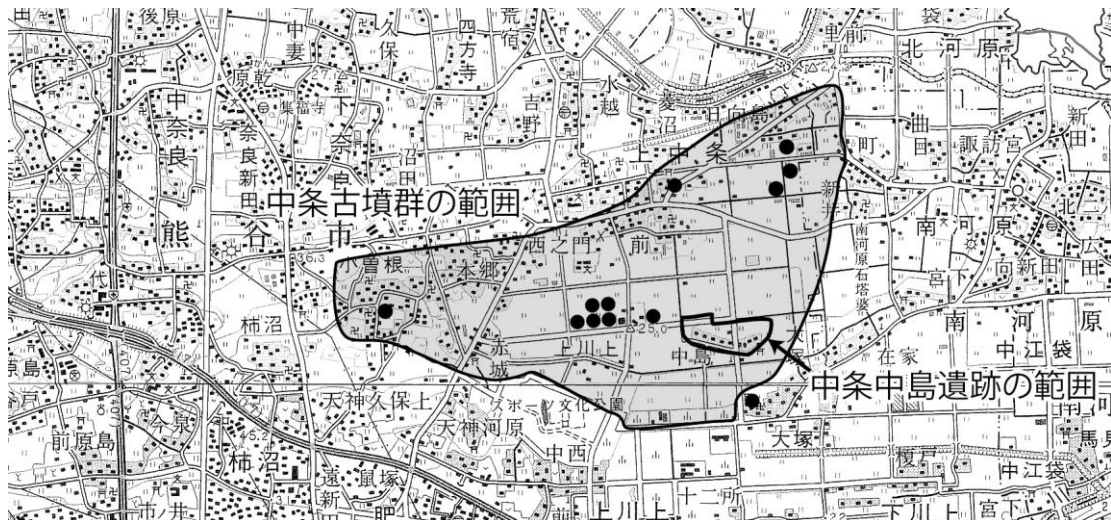
※「埼玉」の表記は県名では、「さいたま」ですが、古墳群の名称では「さきたま」と呼びます。

本文では混同を避け、ひらがな表記の『さきたま古墳群』を使います。さきたまが好きだからです。

1.はじめに

埼玉県の北東部に拠点を置いたと思われる「さきたま古墳群」の王族たちは、5世紀後半から7世紀の中ごろまで約150年の間、現在の行田市埼玉の地に連続して大型古墳を造り続けたと考えられています。「オウケノオミ」の名を刻む^{きんさくめいてっけん}金錯銘鉄剣を副葬した「稲荷山古墳」が最初の築造とされ、方形の周溝に取り囲まれた前方後円墳という特徴的な姿をしています。また、丸墓古墳は国内2位の大円墳です。埼玉県では1位の規模、第2位は熊谷市の青山古墳(直径90m)になります。

さきたま古墳群の時代、熊谷市域はいわばさきたま王権の傘下にあったと云ってもいいでしょう。市域からは荒川を介して石材や窯場で造られた埴輪や鉄製品などが運ばれたようです。將軍山古墳出土の大形円筒埴輪の一部は熊谷市千代所在の権現坂埴輪窯跡群で造られ運ばれたと考えています。鉄剣に刻まれた「ワカタケル大王」がヤマト政権の大泊瀬幼武天皇(雄略天皇)としたら朝廷との強いつながりのもと、さきたまの王を介して市域の古墳や集落から発見される文物がもたらされたのかもしれませんが。



中条古墳群・中条中島遺跡の範囲

2.「中条」という場所 利根川・荒川という両大河川の乱流した妻沼低地では、その分流に沿いに生まれた多くの微高地は生活に農耕に適しており、西側の台地を巡った伏流水が豊富に噴井する扇端部にも位置することから水利にも恵まれたようです。このような環境があったことが、弥生時代来数多くの集落をつくり出したと考えられます。中条中島遺跡をはじめ、一本木前・根絡・池上・北島・前中西・諏訪木遺跡などからの古墳時代へ続く集落が確認されています。

4世紀後半から5世紀前半の集落はやや希薄になるものの、5世紀中頃から7世紀前半頃まで「中条古墳群」が約2×3kmの広い範囲に造られます。古墳は上中条支群・今井支群・大塚支群・小曾根支群にまとまりが見られ、現在までに39基を確認していますが、削平された古墳・埋没する古墳も多いため増加すると見込まれます。古墳名が残る鎧塚古墳と女塚古墳は発掘調査が行われ、全長40m規模の前方後円墳と判明しています。多数出土した埴輪や須恵器から築造時期はさきたま稲荷山古墳に前後し、女塚1号墳は稲荷山古墳と同じく二重周溝を巡らせていました。

さきたま古墳群から中条までの約8km圏内には盟主に相当する大型古墳は他になく、中条古墳群内にも大型の前方後円墳は見当たらないことから、さきたまの王に従属していたと思われます。

中条古墳群の周辺では横塚山古墳(上奈良)、とやま古墳(行田市)が稲荷山古墳の出現とほぼ同時期とされることから、妻沼低地の一定の開発の進展が地域の政治力に安定と結合をもたらし、その象徴としてさきたま王権の確立と古墳群の出現に至ったとする考えもあります。中条中島遺跡のように5世紀前半以前の集落の存在はさきたま王権の成立基盤を造った先進的な集落のひとつと考えられと思います。

3.中条中島遺跡発掘調査の概要

2017年4月～5月の発掘調査により、重なり合った竪穴住居跡5軒と大量の土器が出土しました。土器は古墳時代前期に相当し「五領式」とされる土器形式です。主に東海地方西部(三河地方)の影響を受けたS字形に口縁が屈曲する台付の甕や東海地方東部(沼津地方)の影響を受けた二重口縁の大型壺、近畿地方の影響を受けた小型器台など生活文化の交流を示しています。整理途中ですが主なものを今回展示しました。

遺跡の出土位置は「中島」地名のとおり東西に細長い島状をしていますが、竪穴住居跡の床は現地表面から1.8mを測り、堆積土の大部分は茶褐色から青灰の泥土で洪水が原因による埋没土でした。住居が造られた約1600年以前は中島の微高地を取り巻く環境はもっと起伏に富み、集落も広範囲だったのではないかと推定されます。

竪穴の床面からは高温で焼き付いた「火床」がいくつも現れ、中心部は還元し周囲は赤変していました。「小鍛冶炉跡」と呼ぶ遺構で、炉で成型したい鉄素材を熱し、鍛造成形して農具や武器などを製作した跡です。炉に差し込み温度を高めるため送風管に使われた「羽口」のかけらや、鉄滓(溶けた鉄くず)をはじめ、成形台に使われた台石片、砥石なども出土し一連の鉄器生産を示す資料が揃っていました。前期の鉄器製作遺構は成沢行人塚遺跡でも発見されており、後期の集落では発見例が増えます。

なお、古墳時代前期頃に材料の鉄素材は、朝鮮半島から入手した延板状の「鉄錠^{てつてい}」が主とされ、群馬県富岡市「上丹生屋敷遺跡」からは一連の工具と共に「鉄錠」の実物が出土しており、朝鮮半島と通交とヤマト政権との関係などから東国へ、おそらく熊谷市域にももたらされていたと考えられます。それは経済活動というより、ヤマト政権の勢力圏への取り込みなど政治的な理由による譲渡や下賜とも考えられます。いずれにしても鉄を受け取った妻沼低地の開発者は、後にさいたま王権を育んだ地域集団の主であったろうと考えられます。

中条中島遺跡の南方に位置する「中条大塚古墳」は発掘調査により7世紀代の横穴式石室を持つ円墳と判っています。盗掘のため少数遺物だけの発見でしたが、「桂甲小札」という鎧の部品と金銅製の鞘尻金具(金銅製の「頭椎大刀」の一部)という豪華な武具が副葬されていたことが判っており、さいたま王権の一担を占めた人物と想像されます。古墳時代の間、中条地域に一定の勢力を保っていたと推定されます。



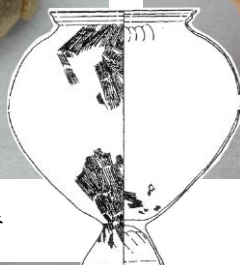
「二重口縁壺」の口縁部
段部を肥厚させ刻みを施す



「広口壺」の口縁部



「S字状口縁台付甕」の体部上半



「直口壺」の体部上半



「S字状口縁台付甕」の台脚部





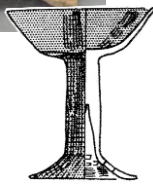
小型丸底鉢



高坏・器台の脚部



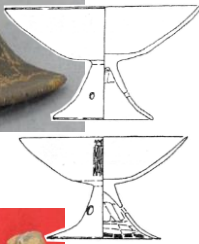
器台



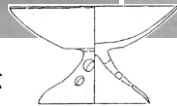
柱状高坏脚部



高坏・器台脚部



小型精製高坏



砥石



羽口小破片

4.付記 中条中島遺跡の東端に小さな社(中島明神社)が立っています。弁財天が祭神とされ、かつては社の南北に小川が流れ川中の島のような立地で、南側の川の源流には質の良い水の湧く泉があったといえます。土地改良のため今は無くなっていますが、伝承にある「三畝の溜井」と「天野河原用水路」になるのではないかと思います。

この質の良い水に目を付けたのは近世末の奈良の偉人「吉田市右衛門」で、この質の良い泉を使い家業の酒造りに使用したといえます。この水が絶えぬよう、泉の清浄が守られるように社を新たにし、維持のために給田を寄付したとの話を地元の方がいきました。

【参考文献】

『古代東国と畿内王権』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会 2014年

『東生 第4号』東日本古墳確立期土器検討会 2015年

『東生 第6号』東日本古墳確立期土器検討会 2017年

【令和元(2019)年10月10日発行】

熊谷市立江南文化財センター(熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係)